

牧梅相院五輪塔

分類 五輪塔
年代 享保五年（一七二〇）
所在 牧



国道四二三号線（摂丹街道）の亀岡市西別院と豊能町牧の境に位置する梅相院（長福寺）に、永享年間に、弥勒寺別院庄西の笑路に「笑路城」を築いた長澤六郎正綱、家綱を始め氏族の菩提を弔うために建立された五輪塔が建っている。

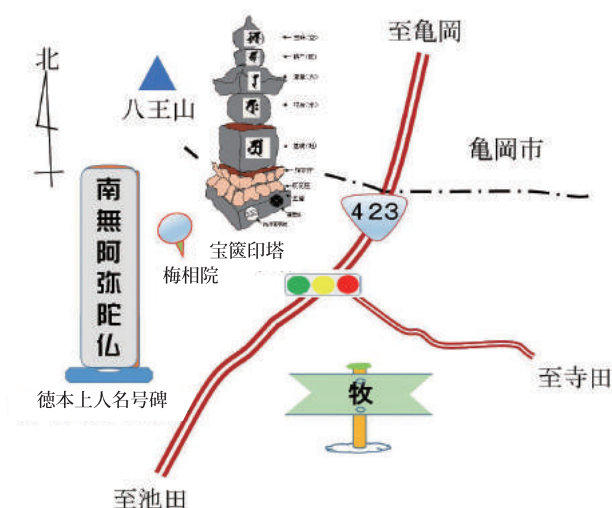
この五輪塔は二重基壇で複弁反花を配し、その下部左側に長澤家の家紋「丸に二つ引両」と「蓮華紋」が刻印され、もう一つの基壇には請花を設けている。

五輪塔は、地・水・火・風・空の仏教五代思想の教えよりきている。東西南北の各面には四門（東方：発心門、南方：修行門、西方：菩提門、北方：涅槃門）を示す梵字が刻まれている。

石英閃緑岩製で造られた六尺塔（総高約一七五cm）である。基壇には次の刻銘

（正面）永澤院 ■■■■ 居士
（右面）享保五庚子
（左面）六月廿八日
（裏面）俗長澤 ■■■■

があり、在銘入り遺品として、郷土の歴史を知る上においても貴重なものである。



（正面）永澤院 ■■■■ 居士
（右面）享保五庚子
（左面）六月廿八日
（裏面）俗長澤 ■■■■



168cm

牧梅相院の徳本上人六字名号碑

分類 名号碑
年代 文化九年（一八一二）
所在 牧梅相院墓地



本堂隣の墓地正面にある。花崗岩製で三段の切石の上に建ち、地上高さ約一五四cmである。

（右面）碑尊號徳本上人真筆也當山江度々來臨

称名弘通普化益依而為報謝人々建立之畢

（正面）南無阿弥陀佛

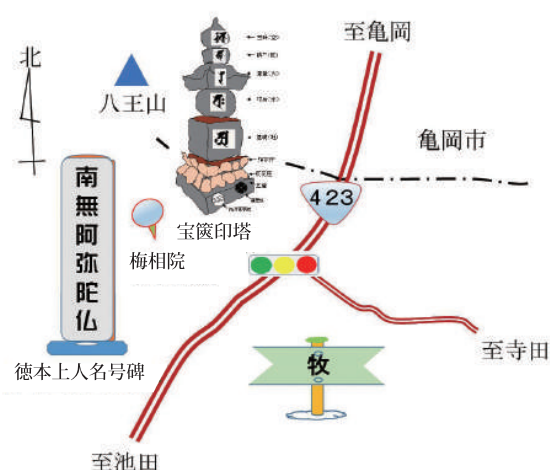
（左面）文化九壬申天 八王山現住

季夏佛祥日 願主村中 觀譽 敬白

※（天は年の異体字）

徳本上人は紀州の人であり、宝暦八年（文政元年（一七五八）一八一八）の熱烈な念仏行者であった。東北南部から関東・中部・北陸・近畿・中国東部にかけて布教活動をし、特に日課念仏を強調した。その独特な字体の筆跡（蔦文字）による名号碑「南無阿弥陀佛」は各地に残っているが、本碑は上人が勝尾寺から丹波へ布教した道筋にある。

吉川地区にも徳本上人の花押入りの名号碑がある。



154cm

（右面）碑尊號徳本上人真筆也當山江度々來臨
称名弘通普化益依而為報謝人々建立之畢
（正面）南無阿弥陀佛
（左面）文化九壬申天 八王山現住
季夏佛祥日 願主村中 觀譽 敬白

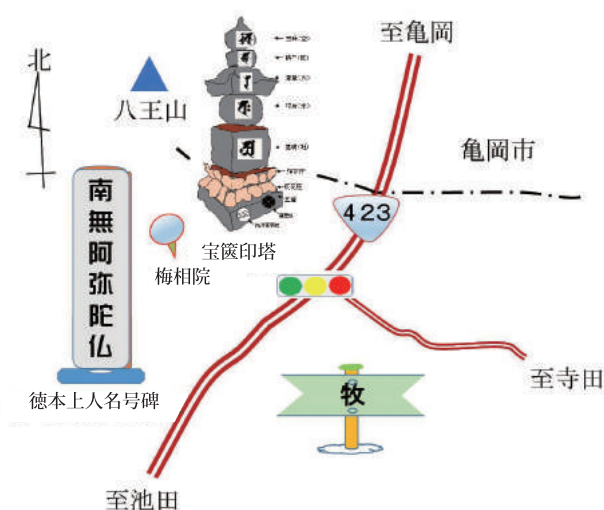
牧梅相院の石塔群

分類 石塔群
年代 室町中期
所在 延享五年（一七四八）
牧梅相院墓地



梅相院墓地には、多くの石塔がある。古いものでは無銘ながら室町時代と見られる宝篋印塔がある。そのほか江戸時代前期から中期にかけての紀年銘を有する石塔が見られる。年代順に列挙すると、

- ①宝篋印塔 相輪等破損しているが、室町中期頃。塔身に金剛界四仏。
 - ②二石五輪塔 貞享五年（一六八八）銘。比翼の逆修仏。
 - ③笠塔婆 元禄十三年（一七〇〇）銘。長澤家の墓標。
 - ④地藏立像 台石に正徳五年（一七二五）銘。
 - ⑤三界万霊碑 享保三年（一七一八）銘。上部に阿弥陀如来坐像。
 - ⑥五輪塔 享保五年（一七二〇）銘。長澤家の墓塔。
 - ⑦地藏坐像の道標 左足を踏み下げにした半跏の地藏像を乗せる六角の台石の各面に道標が刻まれている。その刻銘は「含霊」「左かめ山道」「右いけた道」「延享五年」（一七四八）「當村今北金助」「立之」とあり、もとの場所は不明であるが、寺の前には池田亀山道が通っている。今北金助は誰なのかはわからない。
- 「かめ山」は今の亀岡である。



牧太歳神社の鳥居

分類 鳥居
年代 享保二年（一七一七）
所在 牧



牧は寺田と共に、昭和三十三年、当時の東能勢村に越境して編入した。

以前は、京都府に属し丹州桑田郡牧村と称していた。明治四十年の旧東能勢村の神社合併合祀にも参加せず、鎮守の森に鎮座する産土神（うぶすなのかみ）として氏子の尊敬を集めて現在に至っている。

祭神は大己貴神（おおなむちのかみ）、稲田姫命（いなだひめのみこと）、須佐之男命（すさのおのみこと）である。

鳥居には次の刻銘があり

（右柱） 享保二丁酉天八月吉日

（天は、年の異体字）

また鳥居と一体となった石の扁額には「正一位」の刻銘があり、格式の高さを知らることができる。

さらに境内には、旗本前田信知が天保三年三月に建立した燈籠が一对建っている。



290cm

（右柱） 享保二丁酉天八月吉日



正一位
太歳神

牧太歳神社の石燈籠

分類 燈籠
年代 天保三年（一八三二）
所在 牧



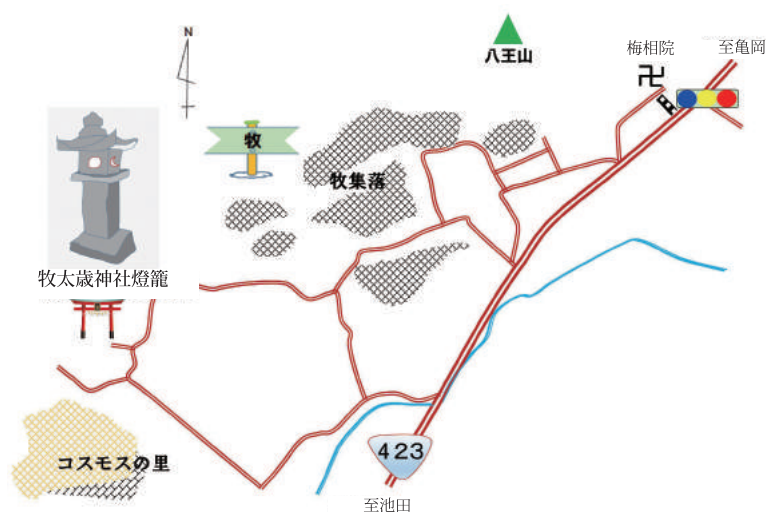
本殿前に石燈籠一対が建っている。江戸時代後期の造立で、「武運長久家士悉地村人安全」の刻銘から、前田信知が旗本の武士であった前田家と村民の安全を願い、神への献燈（寄進）をしたものと思われる。

前田信知は、江戸初期、当地領主であった旗本前田安芸守（豊臣政権五奉行の一人であった前田玄以の子孫で京都町奉行大目付まで出世）の子孫にあたる。

この燈籠には次のような刻銘がある。

（正面） 燈献 武運長久家士悉地村人安全
（左面） 前田信知後室建之
（裏面） 天保三年籠舎壬辰三月吉日

郷土歴史を知る上でも貴重なものである。



（正面） 燈献 武運長久家士悉地村人安全
（左面） 前田信知後室建之
（裏面） 天保三年籠舎壬辰三月吉日

牧庚申塔（青面金剛）

分類 庚申塔
年代 不詳
所在 牧

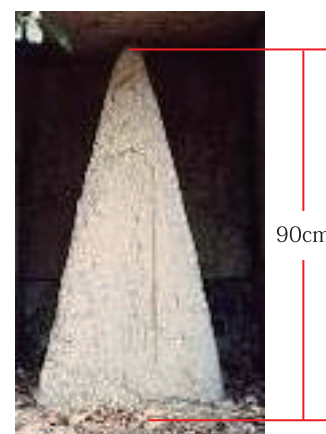


牧・寺田を結ぶ町道の傍らに建っている。

人間の体内には三尸（さんし）の虫（見ざる・聞かざる・言わざる）がいる。六〇日目毎にまわってくる庚申（こうしん）日に、人が眠っている間に人の体内から抜け出して、天に昇ってその人の罪業を天帝に告げる。天帝はそれを聞いてその人の死期を早めるという説があるため、この夜は身を慎み一夜を眠らずに過ごすという。またこの夜に受胎した子は、大盗人や罪悪を犯すといつて嫌われ、床を共にすることはなかった。村人たちは集会所などに集まり、夜を徹して酒食をしたという。このようにして、村人の連帯意識が高まり村の講中も盛んになっていったようである。

室町時代から全国におこった庚申信仰、発祥の地は大阪・天王寺である。

大宝元年（七〇一）疫病が大流行した際、仏家では帝釈天（たいしゃくてん）、青面金剛等の仏を、神道では猿田彦神（さるたひこのかみ）を祭って災いを祓った。



牧宝篋印塔

分類 宝篋印塔
年代 南北朝
所在 室町時代と推定
牧水口



鴻応山登山口（牧上地区）にある。この宝篋印塔は基壇の上に「基礎・塔身・笠・相輪」から成る。笠の隅飾突起は二弧で垂直に近く、ほぼ原形を留めているが、一部欠損しているのが残念である。

塔身の梵字は浅いが金剛界四仏を配し、基礎は四面に格狭間を刻んでいる。基壇は半ば地中に埋まっているが、様式から南北朝～室町時代の造立と推定される。関西形式で造られており、総高一八五cmは本町最大級である。平成二四年九月に発見されたもので集落の中に鎮座する。



牧役行者の石像

分類 石室
年代 江戸時代と推定
所在 牧後谷



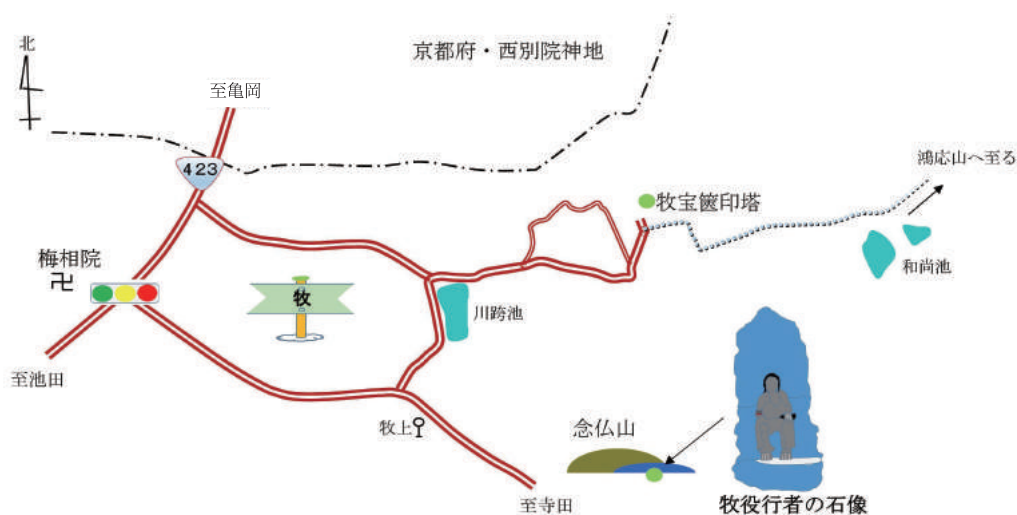
修験道の祖とされる役(えん)の小角(おづぬ)は、奈良時代に大和国(奈良県)葛城山に住んで仏教を修業し、吉野の金峰山・大峰山などを開いた。

『続日本紀』は、彼が伊豆に流されたという記事を載せている(文武天皇三年五月条)。彼は呪術をもって評判が高く、そのために讒(ざん)によって遠流に処せられたという。

古来の山岳信仰界においては、彼の評判は高くなり、役行者の名は広まった。

中世以降修験道の霊山が各地で活気をもつにしたがい、山伏達は、彼を理想の修行者として崇拜するようになり、近世には各所で行者講がつくられた。

牧の役行者像は、同村の行者講によって祀られたものである。両開きの石扉があり、石室内には、高さは四四cmの像がある。作は江戸時代と推定される。



牧妙見山の道標

分類 道標
年代 明治期と推定
所在 牧



この道標は、京都方面から亀岡・牧を経て妙見山詣の参道に建てられている。道標には次のような刻銘がある。

右

能勢妙見宮 京都 上組 大西講

刻銘によると、京都の大西講が建立したもので、明治期のものと思われる。

江戸中期以降隆盛をきわめた能勢妙見信仰は、開運・諸願成就の神仏として世に知られ、明和五年（一七六八）には女人禁制がとかれた。さらに、何人、何宗を問わず妙見さんに百日参籠（さんろう）すると、たちまち効験を得られるとされた「百日法華」を目指した人々が登拝したことから、民衆の参詣の広がりにつながったものと思われる。

畿内は勿論のこと、山陽・尾州（尾張）・若州（若狭）・三丹（丹波・丹後・但馬）の地からも結社し参詣した。

したがって、本町に妙見信仰の道標や建碑が数多く残されているのは、こうした由縁があるからである。



右

能勢妙見宮 京都 上組 大西講

